

2015年5月17日川越教会

## 神の働きの不思議さ

加藤 享

### 【聖書】 使徒言行録 18章 1～11節

その後、パウロはアテネを去ってコリントへ行った。ここで、ポントス州出身のアキラというユダヤ人とその妻プリスキラに出会った。クラウディウス帝が全ユダヤ人をローマから退去させるようにと命令したので、最近イタリアから来たのである。パウロはこの二人を訪ね、職業が同じであったので、彼らの家に住み込んで、一緒に仕事をした。その職業はテント造りであった。パウロは安息日ごとに会堂で論じ、ユダヤ人やギリシア人の説得に努めていた。

シラスとテモテがマケドニア州からやって来ると、パウロは御言葉を語ることに専念し、ユダヤ人に対してメシアはイエスであると力強く証した。しかし、彼らが反抗し、口汚くののしったので、パウロは服の塵を振り払って言った。「あなたたちの血は、あなたたちの頭に降りかかれ。わたしには責任がない。今後、わたしは異邦人の方へ行く。」パウロはそこを去り、神をあがめるティティオ・ユストという人の家に移った。彼の家は会堂の隣にあった。会堂長のクリスポは、一家をあげて主を信じるようになった。また、コリントの多くの人々も、パウロの言葉を聞いて信じ、洗礼を受けた。ある夜のこと、主は幻の中でパウロにこう言われた。「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。わたしがあなたと共にいる。だから、あなたを襲って危害を加える者はない。この町には、わたしの民が大勢いるからだ。」パウロは一年六か月の間ここにとどまって、人々に神の言葉を教えた。

### 【序】 川越での伝道開始

川越教会の日曜礼拝は、1968年5月5日に川越市岸町1丁目23-1畔上アパートの一室で守られました。浦和教会副牧師の小久保富成先生夫妻と川越から大宮教会に通っていた高柳千代姉と後藤陽子姉の**4人の礼拝**だった由。どんな礼拝だったのでしょうか。どうして川越の地を選んだのですかと小久保先生にお聞きしたら、厳しい穴井牧師から早く逃げ出したかったこと、そして自分の出身地が飯能で浦和との中間点が川越だったので決めたとのことでした。

3年後の1971年4月に同じ番地の一軒家を借りて礼拝するようになるとともに、5人の幼児を預かる幼稚園(**小羊園**)が開設されました。やがてバプテスト連盟の資金で現在地の土地を購入し、**1973年3月18日に教会堂献堂式**、小羊園も新しい建物で継続されるようになりました。1980年3月に小久保牧師は福島旭町教会に転任され、小羊園は1981年3月で閉園。翌4月から二代目小河義伸牧師が就任しました。

4年後、**1985年**3月10日の教会定期総会で教会組織の決議をし、5月12日に母教会の浦和教会総会で承認を得て、**6月23日に教会組織感謝礼拝**をしました。伝道開始から17年、北関東連合の17教会中10番目の教会誕生でした。1997年7月古い礼拝堂が火事で焼失したため、連盟諸教会の助けを得て**2001年1月8日**にこの礼拝堂の献堂式を行いました。建築資金の返済も今年の3月で終了しました。現在教会員29名、礼拝出席者平均27名の群れです。来る6月21日に教会創立30周年記念礼拝を守ります。会員数、礼拝出席数50名を目指して、新たな歩みを進めて行きたいものです。

## [1] コリントでの伝道開始

さて私たちの聖書の学びは、4月5日の復活節（イースター）から使徒言行録に入り、イエス・キリストの十字架の**福音が全世界に伝え広められていく歴史**をたどってきました。この世界宣教の立役者は、かつてのキリスト教迫害者から劇的な回心をした使徒パウロです。先週は哲学の都ギリシャのアテネ伝道でした。今日は東西貿易の中継地として栄える商業都市**コリントでの伝道**です。

コリントの町にはギリシャのアカイヤ州を治めるローマ総督府があり、西のイタリア半島と東の小アジア各地からの物資の交流と共に、人も文化も富も集まって来て活気にあふれた大都市でした。南の丘には女神アフロティトの神殿が建てられ、神殿娼婦が1000人も居たと言われています。**道徳的にも頹廃**した町となり、英語の辞書でもコリントという地名の形容詞（Corinthian）は「道楽者、どんちゃん騒ぎをするドラ息子」と英和辞典に記されています。このような都市で、パウロはどのように伝道を開始したのでしょうか。

彼はユダヤ教のラビ（教師）の資格をもっていますから、安息日にユダヤ教の会堂に出席し、そこでユダヤ教の文書旧約聖書の説教をしました。ラビは日常生活の糧を得る職業を身に着けています。パウロは**皮なめしのテント造り**をするアキラとプリスキラ夫婦の店に寄宿して働きました。この夫婦も、最近までローマで暮していましたが、皇帝の**全ユダヤ人追放令**（紀元49年）によって追い出され、コリントに来たばかりでした。

恐らくローマのユダヤ人の間にキリスト信者が増え出し、ユダヤ教信者が排斥運動を募らせ始めたので、騒ぎが大きくならぬように、ユダヤ人全員が退去させられたのでしょう。地中海を囲む当時のローマ帝国の世界では、ユダヤ、サマリヤ、フェニキア、シリア等の東の世界からローマに出て来る人々も多く、その中にキリストの福音を聞いて改宗したユダヤ人も混じっていたのでしょう。

人の動きは速いですね。ですから**パウロのコリント到着**は、ユダヤ人追放令が出た翌年の紀元**50年頃**でしょう。

パウロはマケドニア州のテサロニケやベレアに残して来た弟子のシラスとテモテがコリントに到着すると、仕事をやめて福音宣教に専念しました。そして「大祭司や学者たちが十字架につけて殺した**ナザレのイエス**こそ、旧約聖書が予言してきた**救い主メシヤ**なのだ」と力強く証ししました。すると大多数のユダヤ教徒は強く反発し罵りましたので、パウロは服の塵を振り払って、「**私は異邦人の方へ行く**」と宣言し、会堂から離れることにしました。

ところがパウロは、こともあろうに**会堂のすぐ隣り**のユストの家で集会を始めたのです。そしてユスト一家ばかりか**会堂長**（会堂の管理者）クリスポ一家もキリスト信者になったのでした。これは驚きです。これまで長い間会堂と一緒に安息日の集会を守って来た仲間が口汚く罵り反抗するパウロの言葉を、ユストとクリスポ一家は信じて、古くからの仲間との交わりを絶ち切り、すぐ隣りで新しい礼拝を守り始めたのです。

私たちにそれだけの**勇気と決断**があるでしょうか？ 友人との長い付き合いを大事にして、信仰の表明をあいまいにしてしまうのではないのでしょうか。クリスポは会堂長という仕事と肩書きをも失うのです。まさに信仰は**自分と家族の人生をかけた決断**なのですね。この決然とした信仰を見たコリント人の多くも、パウロの説教に応答して、イエス・キリストを信じて、バプテスマを受けました。コリント教会の誕生です。私たちも**信仰の旗印**をしっかりと掲げて、証しをしていきたいものです。

伝道の成功は嬉しい限りです。でも信者が増えていけば、当然ユダヤ教からの迫害が激しくなっていきます。コリントに来るまでに**テサロニケやベレア**で被った**激しい迫害**が繰り返されるでしょう。パウロは祈りました。そして主の声を聞いたのです。「**恐れるな。語り続けよ。黙っているな。わたしがあなたと共にいる。だから、あなたを襲って危害を加える者はない。この町には、わたしの民が大勢いるからだ。**」

わたしの民とは、ユダヤ人ではなく、コリントの町に暮す種々雑多な異邦人を指します。ユダヤ人が差別してきた異邦人を、神さまは**わたしの民**と呼び、しかも**大勢いる**とおっしゃっているのです。何と嬉しいことでしょう。パウロは勇気百倍、1年6ヶ月留まって、神の言葉を語り続けたのでした。コリント

教会が大きくなっていきます。案の定ユダヤ人たちはパウロを襲い、総督の前に引き立てて行きましたが、総督は正しい裁きを下して、パウロを守ってくれました。パウロは更にしばらく滞在を伸ばして、伝道しました。

## [2] 神の教会

こうして大伝道者パウロと弟子たちが腰を据えて建て上げた大きなコリント教会です。ところがこの教会は実に**問題を沢山抱えた教会**で、後々までも旅先からパウロは、幾度の**手紙**を書き、**使者**を送り、彼自身も**訪問**しています。その記録が新約聖書には、**コリントの信徒への手紙 I、II**の形で編集されています。

この二つの手紙を読みますと、先ずパウロ派、アポロ派、ペトロ派、キリスト派などの**グループ**が生まれ、奉仕者が優劣を競い、なかなか一致しません。不品行な者を戒め、教会内の秩序を確立することに欠けています。結婚や家庭についての教え、偶像礼拝に対する態度、礼拝・集会の秩序等についての信仰の不足等々が生み出している**混乱**が記されています。そしてそれに対するパウロの信仰の助言が、今日それを読む私たちにも、大きな信仰の恵みを与えてくれています。

パウロはこのような教会に対して、二つの手紙とも、「コリントにある**神の教会**」と呼びかけ、「いつもわたしの神に**感謝**しています」(I 1:5)「あなたがたについてわたしが抱えている**希望**は揺るぎません」(II 1:7)と述べて、書き始めています。私はこの言葉を読む度に、**深い感動**を覚えます。こんなに**ごたごたした教会**なのに、パウロはどうしてこのような言葉が言えるのでしょうか。

それはコリント教会の**現実の姿**の根底に、もう一つの現実、即ちキリスト・イエスによって清められているという根源的な**霊的現実**をしっかりと見据えていたからに他なりません。**キリストの十字架**にはどんな人をも清める力があること、そして**終わりの日**、キリストが再び来て下さる時には、責められるところのない**完全な者**に**していただける**という、イエス・キリストの**救いの絶大な力**への固い信仰があったからにほかなりません。

どんな教会でも**神の教会**なのですね。**キリストの体**なのですね。私はこのような手紙をパウロに書き残させたコリント教会に感謝します。またパウロにコリントの町で伝道させて、コリント教会を誕生させた神さまの御業の不思議さ、素晴らしさに驚きます。

## 【結】 信徒伝道者

終りにもう一つ、コリント伝道で見過ごせない恵みがあります。**アキラとプリスキラ夫婦**の存在です。恐らく彼らは既にキリストを救い主と信じる信仰を持っていたのでしょう。ローマから追放され、コリントにやって来て、テント造りの店を構えました。そこへ福音の宣教者パウロが訪ねて来たのです。彼らは喜んで**我が家に迎えて**、一緒にテント造りをしながら、安息日に会堂に集って集会を守るだけでなく、日々に福音信仰をパウロから直々に学んだことでしょう。パウロがユダヤ教の会堂を離れて、ユストの家で集会を始めるや、彼らもその集会の大黒柱になったのではないのでしょうか。

2年後、パウロがコリントを発ち、エフェソを經由してエルサレムに帰って行く時、アキラとプリスキラ夫婦も**コリント滞在を切り上げて**、エフェソまでパウロに同行し、**エフェソに留まりました**。そして雄弁な説教者**アポロ**がエフェソ教会でしばらく伝道した時には、彼を自分の家に招いて、パウロから学んだ正しい福音をアポロに教えています。そして彼がコリント教会でも働けるように、紹介状を書いて送り出しました。

パウロが第3回目の世界宣教の折り、エフェソに立ち寄り、そこから**53年頃**にコリント教会に手紙を書いています。その手紙の終わりに「アキラとプリスカが、**その家に集る教会の人々と共に**、主においてあなたがたに宜しくとのことです」（Iコリント 16:19）と記しています。

またパウロが、願いつつも未だローマを訪問出来ずにいる**56年頃**に、コリントから**ローマの信徒への手紙**を書き送りましたが、その終わりにこのような挨拶を書いています。「キリスト・イエスに結ばれてわたしの協力者となっている、プリスカとアキラによろしく。命がけでわたしの命を守ってくれたこの人たちに、わたしだけでなく、異邦人のすべての教会が感謝しています。また、**彼らの家に集まる教会の人々**にもよろしく伝えてください。」（ローマ 16:3~5）

アキラ夫婦は2~3年エフェソで働くと、ローマに戻ってテント造りを続けながら、自分の家で直ぐに集会を始めて、集まる人々のお世話をしていました。この夫婦はこのように、行く先々で**自分の家で集会を始めて**伝道していく**信徒伝道者**でした。パウロやアポロだけでなく、アキラ夫婦のような信徒伝道者が各地で働いたので、福音が全世界に拡がって行ったのでした。日常生活の場で触れ合う人々と一緒に、家の集会をすることが、多くの人々に福音を伝

えます。川越教会にも、家庭集会が生まれるとよいですね。

お祈りします

神さま、今朝もこのように礼拝を守り、貴方のみ言葉を聞き、学ぶことが出来て感謝します。ユダヤ人会堂のすぐ隣に住んでいたユスト一家と会堂長クリスポー一家が、パウロの宣教を聞いて、長く一緒に安息日の集会を守って来たユダヤ教の信仰の仲間との絆を断ち切って、イエス・キリストを救い主と信じる信仰の歩みを始めました。信仰は自分と家族の人生をかけた決断なのですね。またどこの地に移っても、自分の家で集会を守り、身の回りの人々に信仰の証しを続けたアキラとプリスキラ夫婦が、世界宣教の推進力になりました。このような信仰者を生み出して福音を広めていかれる貴方のお働きを感謝します。また問題を多く抱えたコリント教会から、私たちは大切な信仰の学びを今日でもさせて頂いている恵みを感謝します。貴方の御業の不思議さ、素晴らしさに感動を新たにしました。神さま、私たちをもお用い下さり、あなたの恵みの御業をお進め下さいますように。救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。 アーメン